

IV 母子緊急医療体制に関する調査

鈴木忠義（足柄上保健所）

1 調査の主旨

神奈川県下の母子緊急医療体制における二次緊急医療の現在の能力を知り、将来のシステム設計の資料とする。

2 調査対象

産科・小児科および眼科のある300床以上の国公立病院の一部をこの調査の対象とする。

3 調査方法

原則として研究班員が面接依頼し、留め置き記入とする。

4 調査内容

別紙調査票（省略）のとおり。

5 回収率

14病院中13病院、未着は督促中である。

6 調査結果

(1) 病床数

許可病床数および看護婦不足、医師不足その他の理由で閉鎖中の病床もあることを予測し、入院可能病床数についても調査をする予定であったが、趣旨が徹底していないところもあるので、機会をみて再調査をしたい。結果は表4に示した。

a 全体病床数

病床数の大きいのは1,052床、1,050床であるが何れも大学病院である。許可病床数にほぼ同じであるが使用可能病床数ではないと推測している。第三位の968床は公立病院である。最少は280床であるが許可病床数は310床である。

b 産科病床数

最も大きいのは66床、最小は10床である。記載の数字は産科のみの場合と、産・婦人科としての場合と両者がある。産（婦）、婦人科を含む、3分の2が産科、除（婦人科と註記した回答があった。産科病床数のみを知ることは産婦人科棟（室）として運用され両者の区分を固定しないので、使いわけの比率は流動的であるところが多く、調査目的を十分達し得なかった。

全体病床に対する割合では16.4%が最も高く、最小値3.3%であった。その病院の性格地域特性等に左右されている様子がうかがえる。

c 小児科病床数

最大は128床、最小は18床、19床である。新生児用病床を別掲したものは合計した数字を用いた。全体病床数に対する割合では15.7%が最も高く、最小では実数38床4.7%である。

産科・小児科の病床数の全体に占める割合は必ずしも一致せず、産科が高いところ、小児科が高いところがある。13病院の単純な合計における両科の病床数の比率は6.9%、9.3%でやや小児科に高い。

(2) 医師数

各科に勤務する医師数を常勤、非常勤に区分して知ることを目的とした項目である。結果は表5に示した。

a 全体の医師数

大学病院は絶対的に多数である。これを除外すると最も多いのは89人、最も少ないのは27人である。しかし10床当りの医師数は0.92人、0.90人で両者に差はなく、調査病院の中で最も低いことは興味ぶかい。13病院の合計では10床当り1.80人であるが、大学病院を除くと3,796床に対し423人であるから10床当りは1.11人である。これらの数字

は常勤医師数についてのものであるが、つぎに非常勤医師数では、大学病院を除くともっとも多いのが21人であり、最も少ないのは1人である。常勤医師数に対する比率では0.5から0.03まで巾があった。

b 産科医師数

全体の医師数の場合は大学病院が絶対多数を占めていたが、産（婦人）科、小児科の場合は必ずしもそうではない。

産（婦人）科医師の最も多いのは20人、最も少ないのは3人であり一般には4～6人である。病院全体の医師に対する比率では20.0%が最も高く、3.9%が最も近い。

産（婦人）科病床10床当りの医師数は5.7人がいちじるしく高く、平均では2.1人、過半数は1.0～1.7人であった。

非常勤医師は大学病院でも0であったり無記入であったりするところもあり、15人のところもあったりでバラツキが目立った。常勤医師との比率では0.75という高率なところがあった。

c 小児科医師数

21人、14人、13人と多いところは何れも大学病院であり、他は2～8人であった。病院全体の医師数に対する比率では11.5%、10.8%という高率もあるが5～9%が大多数で、2.6%がもっとも低かった。

小児科病床10床当りの医師数では3.4人、2.8人と高いところもあるが大部分は0.6～1.1人の間であった。

非常勤医師数は大学病院を除くと最も多いのは5人で、週6回が2人、3回が1人、1回が1人、隔週1回が1人となっている。産科と比較すると非常勤の医師の比率はやや高いように見える。

(3) 看護婦数

看護婦数については表6に示した。

a 全体看護婦数

最も多いのは532人、最少は100人であった。全体病床数に対しては10床当りで最大は6.9人、最少は3.6人である。

b 産科看護婦数

回答には助産婦数を別掲したものあるいは、含む分娩室としたものがあり、他のところでもその様なことが註記されずに報告されたことが推測されるが、外来と明記したものを除いてはその科の看護婦数として処理をした。なおD病院は産科、小児科の看護婦数については報告されていない。

産科看護婦数の最も多いのは分娩室を含めた40人で、最も少ないのは17人であるが、10床当りでは17.0人が最も高く、最も少ないのは4.6人である。その他は5.0人～9.2人であった。全体の看護婦数に対する比率では最高が16.4%、最少は3.6%で、かなりの幅を有する。

c 小児科看護婦

最多は63人、最少は11人であった。+X人という表記は未熟児を産科看護婦が看ているという意味である。

小児科病床10床当りでは、10.5人が最も多く、2.4人が最も少く大多数は4～8人であった。全体の看護婦数に占める比率では最高は17.3%、最低は3.8%でやはりかなりの幅がある。

(4) 新生児・未熟児部門の施設・設備について これらの施設別一覧を表7に示した。

a 新生児室はすべて独立していた。

b 未熟児施設は13病院のうち2病院を除いて独立していた。ただしある病院は未熟児用室は使用停止とし、新生児用室のうち独立した3室を用いている。

c 未熟児室の病床数

記入されている病床数の最大は23床、最小は4床である。しかし平常使用しないものとして23床中の全て、10床中の6床、4床中の3床などの例があり、現在使用可能としての最小は1床である。未熟児病床全てを閉鎖中のところは前記のとおり新生児用室を用いて収容は可能である。なおこの項未記入が5施設あり正確な使用可能の未熟児病床数の把握は困難であった。

d 未熟児室の配管

未熟児室のバイピングは新生児用室と共用を含

めてすべてパイピングされていた。

e 未熟児室（新生児室）用の器具類について
未熟児の保育に不可欠と考えられる器具類等について、未熟児室あるいは新生児室を含む範囲で使えるべきものと想定したものである。

回答の一覧表を眺めると施設院内のすべての数を記載したと思われるような例が二三あり、調査者側の期待に副わない点もみられる。備えられていないとみられるものではつぎのものがある。欠けている施設数を付した。なお大学病院の一端は未記入が多いが、病院規模から考えて保有しているとみられるので別掲で（ ）を付した。

酸素濃度計	1
自動輸液ポンプ	2
光線治療器	2
血糖簡易測定器	2（1）
ポータブル撮影器	1（1）
新生児保温処置台	2
新生児監視装置	9（1）
持続陽圧呼吸装置	4（1）
新生児用気管内挿管セット	2

(5) 新生児・未熟児の医療管理、看護について
回答一覧は表8に示した。

a 医療管理について

出生した児の医学的管理を産科が行うか、小児科なのかは論議のあるところであり実態もまた異なっている。

新生児については産科が行うのが7病院、小児科が4病院、産科と小児科と回答したものが2病院である。一方未熟児は産科・小児科のところは1病院にすぎず、他はすべて小児科医側の医療管理を行っている。

b 看護について

未熟児室の看護単位が独立しているのは4病院であるが、看護婦の配置数は19人から3人に至る間に分布している。未熟児の看護が独立していないその他のところでは産科3病院、小児科が4病院、産科・小児科が1病院であり、母性看護グループという特異な単位が1病院あった。

医療管理が小児科で看護が産科というのが3病院あった。その他新生児室と共同の看護組織というところが1病院あった。

(6) ICUについて

表8に示した。

a ICUの有無

ICUを有するところは6病院、有しないところが7病院あった。しかしこのうち1は現在設備中であり、反面かって保有していたにもかかわらず使用の実績がないので廃止したところもある。

b NICUについて

NICUは大学病院の1を除いて有しない。

c ICU、NICUの看護について

ICUの看護については麻酔科が、現在1将来1、過去に1、各科と回答したものが1、外科系・内科系・小児科系と回答したものが1、循環器科が1、看護部が1、外科1、で分散している。NICUのあるところはICU同様看護部である。NICUを有しないにもかかわらず小児と回答したところについてはICUを共用しているのだろうかとも考えられる。

(7) 産科手術その他の手術の関連事項について
回答の要素は表9に示した。

分娩室は当然のことながらすべての病院がもっている。産科手術室と産科緊急手術室は同じものと考えられたのか、回答は両者が一致している。分娩室で産科の緊急手術が可能と答えたのは7病院である。中央手術室で産科緊急手術が不可能と答えたのは1病院あり、ここは分娩室でも不可能と答えているから、産科の緊急手術はできないと考えざるを得ない。回復監視室をもたないのは、5病院で記載のないところが1病院あった。産科手術台が0または記載がないのは、不特定と答えたところと同趣旨と考えられる。

産科手術につく看護婦は中央手術室所属が9病院、産科が3病院、看護部が1病院である。分娩室での産科手術は産科の看護が行っているようである。

週平均手術数は最も多い120例から少ないところは6例まで分布し、その中での産科手術は、定

義が不明確で記載内容が同一レベルではないかも知れないが、週平均数では多いところで10例、少ないところは0.2例あるいは0～1例のところもある。小児外科手術例は5例がもっとも多く、年間数例と回答したところもある。週平均手術数は13例が最も多く、その他は1～2例、5例、10例という数である。

手術室の看護婦の当直は10病院で実施しているが1～3人である。当直制度のないところではオンコール看護婦の制度があった。記載のない1病院は当直制度があると推測される。

(8) その他の緊急医療関係について

表10に示した。

a 麻酔医

常勤麻酔医を置くところは9病院、大学病院を除くと1～5人である。常勤麻酔医がいないところはパートで頼むところが1、他は産科医が行っている。

b 緊急外来体制

2病院を除いて緊急外来を行っている。

c 夜間のX線検査

2病院を除いて可能

d 夜間の臨床検査

可能なところは7病院で約半数はできない。

e 緊急患者の他へ転送

2病院を除いて転送させた経験はない。有ると答えたところも年間1例、3例でごく少数例である。

f 緊急患者の他からの紹介

記載のない1病院を除いてすべての病院で緊急患者を受けている。産科関係で最も多いところで年間200例、その他は多くて40例であるから週平均1例以下である。

小児科関係では年間5000例というのがあるが、緊急の定義が不明確の故とおもわれる。月間23例という1病院を除けば5～50例であるから週平均1例以下である。

(9) 産科救急器具類

産科救急に際し、分娩室等に常備すべきものと

思われるものを挙げて回答を求めた。結果は表11に示した。

記載のないところもあるが、器具類の機能からみて産科特有のものばかりではないので、病院としてはその他のところで保有しているものと考えられる。

7 考察とまとめ

14病院を選定し二次的レベルの病院の現状を知るためにアンケートをおこなった。質問に不備なところもあり、正確とはいいがたい点もあるが調査の目的はほぼ達し得た。

産科病床は10～66床であるが婦人科を含んでいるものもある。小児科病床は新生児、未熟児を含んで18～128床である。

産婦人科の医師の最少は3人でしかも非常勤はいない。小児科の医師の最少は2人で2病院であった。しかも産科と同様この2病院とも非常勤医師はいない。このようなところで休日、夜間の母子救急センター病院とはなり得ないを考える。看護婦数は10床当りでみると産科にやや多いが病院間のバラつきの方が大きい。

施設、設備関係では未熟児室はすべて独立しバイピングシステムであったが、保有病床数が使用可能数ではないところが多く、特に1床しか開けていないところには何らかの措置を講ずべきものと思われる。

器具類では時代が要求しているものが不足しているところがある。一例を挙げれば、新生児保温処置台、新生児監視装置、光線治療器等である。

手術関係では特に問題はないが、しいていえば手術看護婦の当直を必須とし、人員も最低2人とすべきであろう。産科救急器具類は未記入のものが院内にも設備していないことを意味するものであれば、早急に購入を必要とする。

緊急外来体制では、実施していないと答えたところが2病院あるが、その次の設間による他の医療機関への移送の経験はなく、逆に他かの紹介患者を受けていることから、第二次医療機関としての機能は十分果しうるものと考えられる。

なおこの調査の対象としなかった類いの病院群も設備、人員等もほとんど同様の程度と想定されるものがあるので、母子緊急医療システムにおける救急センター病院としての使命には十分堪えられるものとおもう。

ただし実際にシステムに組み入れ、定時的に機

能するにはさらに慎重に検討し、人件費物件費等の補助のほか、運営については収入支出の扱い、医療事故の責任の問題、あるいは広域的な運営等、協議の場を設定する必要があるろう。これらについては、章をあらためて論述する。

表4 病床数

		全 科 ()は使用可能なもの	産 科 ()は全科に対し	小 児 科 ()は全科に対し
川 崎	A	968	66 (6.8)	128 (13.2)
	B	850 (693)	50 (7.2)	50 (7.2)
横 浜	C	280	46 (16.4)	20 (7.1)
	D	357	36 (10.1)	20 + 26 = 46 (12.9) (ベビー)
	E	805	29 (3.6)	50 (4.7) 実
	F	399	38 (9.5)	54 (13.5)
横 三	G	636 (583)	52 (8.2)	34 (5.8)
湘 南	H	309	34 (11.0)	11 + 7 = 18 (5.8)
	I	300	10 (3.3)	40 + 7 = 47 (15.7)
県 央	J	-	-	-
	K	300	35 (11.7)	19 (6.3)
	L	1050	35 (3.3)	110 (10.5)
	M	1052	37 (3.5) (除婦人科)	88 (8.4)
西 湘	N	300	39 (8.6)	33 (11.0)
計		7396	507 (6.9)	685 (9.3)

表5 医師数

		全 科		産 科			小 児 科		
		人数(A)	10床当り	人数(B)	10床当り	$\frac{B}{A} \times 100$	人数(C)	10床当り	$\frac{C}{A} \times 100$
川 崎	A	89(18)	0.92	17(2W=1)	2.58	19.1	$8\left(\frac{2}{W}=1\right)$ $1/W=1$	0.63	6.2
	B	190(-)	2.74	11(-)	2.20	5.8	14(-)	2.80	7.4
横 浜	C	30(15)	1.07	6(1)	1.30	20.0	2(0)	1.00	6.7
	D	46(21)	1.29	6(0)	1.67	13.0	$4\left(\frac{2}{W}=2\right)$ $1/W=1$	0.87	8.7
	E	205(193)	2.55	11(1/W=15)	3.79	5.4	13(1/W=15)	3.42	6.3
	F	52(5)	0.96	4(0)	1.05	7.7	$6\left(\frac{2}{W}=1\right)$ $1/W=1$	1.11	11.5
横 三	G	60(14)	1.03	5(0)	0.96	8.33	$\frac{6}{W}=2.3$ $\frac{W=1}{1/W=1.05}$	0.88	5.0
湘 南	H	38(1)	1.23	4(0)	1.18	10.5	2(0)	1.11	5.3
	I	44(19)	1.47	3(0)	3.00	6.8	4(1)	0.85	9.1
県 央	J	-	-	-	-	-	-	-	-
	K	37(15)	1.23	4(3)	1.14	10.8	4(1)	2.10	10.8
	L	288(56)	2.74	20(0)	5.71	6.9	21(6)	1.91	7.3
	M	228(-)	2.17	9(0)	2.43	3.9	6(0)	0.68	2.6
西 湘	N	27(13)	0.90	4(1)	1.03	14.8	2(0)	0.61	7.4
計		1334	1.80	104	2.05	78.0	89	1.30	6.6

表6 看護婦数

		全 科		産 科			小 児 科		
		人数(A)	10床当り	人数(B)	10床当り	$\frac{B}{A} \times 100$	人数(C)	10床当り	$\frac{C}{A} \times 100$
川 崎	A	345	3.56	40 (含分娩室)	6.06	11.6	31 (含未熟児室)	2.42	9.0
	B	316	4.56	34	6.80	10.8	19	3.80	6.1
横 浜	C	100	3.57	11+10 (助)	2.39 (4.57)	11.0 (21.0)	11	5.50	11.0
	D	128	3.58	-	-
	E	497	6.17	23+5 (外来)	7.93	4.6	19+5 (外来)	5.00	3.8
	F	224	5.61	35	9.21	15.6	22	4.07	9.8
横 三	G	270	4.63	26	5.00	9.6	18	5.29	6.7
湘 南	H	169	5.47	20	5.88	11.8	13+x	7.22	7.7
	I	208	6.93	17	17.00	8.2	36	7.66	17.3
県 央	J	-	-	-	-	-	-	-	-
	K	150	5.00	22	6.29	14.7	20 (混合)	10.52	13.3
	L	533	5.02	19	5.43	3.6	63	5.72	11.8
	M	379	3.60	24	6.49	6.3	30	3.41	7.9
西 湘	N	152	5.07	25	6.41	16.4	25	7.58	16.4

表7 新生児・未熟児室の施設・設備

	1. 新生児室の独立	2. 未熟児室の独立	3. 未熟児室の病床数	4. 未熟児室のバイピング 平常使用しない病床数	5. 器具類	保 育 器 具	酸 素 濃 度 計	自 動 輸 液 ポ ンプ	光 線 治 療 器	血 糖 簡 易 測 定 器	血 清 ビ リ ル ビ ン 測 定 器	ポ ー タ ブル 撮 影 器	心 電 計	新 生 児 そ 生 器	分 泌 物 吸 引 器	新 生 児 保 温 処 置 台	新 生 児 監 視 装 置	持 続 陽 圧 呼 吸 装 置	脳 波 計	血 液 ガ ス 分 析 器	新 生 児 用 気 管 内 挿 管 セ ット
A	○	○	20	5	10未 20全	1	1	1	3新 2未	1	1	3X 10全	11未 10全	4 4 6	5	1	0	1	2	1	2
B	○	○	-	-	16	3	2	5	5	2	2	5	1	6	4	5	4	3	5	3	5
C	○	×	8	0	5産 3小	1	1	0	2産 1小	1	1	0	0	1	2産 2小	1	0	0	0	1	1
D	○	○	12	0	12	1	1	1	2	1	1	1	1	1	4	1	0	0	1	1	1
E	○	○	10	6	8	3	2	2	2	1	1	中 検	1	1	5	2	-	-	中 検	1	1
F	○	○	9 台 ベース	-	9	2	-	-	5 自家製	1	1	放 放	1	1	1	-	-	1	1	1	1
G	○	○	4	-	8	3	25	-	-	15	1	2	11	1	16	-	0	5	3	2	-
H	○	×	10	-	7	2	2	2	1	1	1	中 検	中 検	1	2	1	1	1	1	1	1
I	○	○	7	0	6	2	5	3	0	(1)	(1)	(1)	1	2	1	1	0	1	(1)	(1)	2
J	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
K	○	×	4	0	34	1	1	1	1	0	1	1	1	1	1	1	0	0	1	1	0
L	○	○	23	-	4	6	13	5	1	2	1	2	27	3	0	210P	7	2	3	7	8
M	○	○	23	23	7	1	3	3	-	1	1	-	1	2	7	1	2	-	-	-	1
N	○	○	4	3	4+3	√	√	√	√	√	√	放 放	2	2	2	1	-	-	1	1	3

○ はい
× いいえ
- 記載なし
... 回答不要

○ 未熟児室
× 産科
- 小児科
... 産科
○ 未熟児室
× 産科
- 小児科
... 産科
○ 未熟児室
× 産科
- 小児科
... 産科

○ 線室
× 放射線科
- 脳波室
... 脳波室

○ なしと思われる
× 検査科と思われる

表8 新生児・未熟児室, ICU等について

	6. 新生児室の所属	7. 未熟児室の所属	8. 未熟児室の看護独立	(1) 配置看護婦数	(2) 所属	9. ICUの有無	10. NICUの有無	11. ICUの看護の所属	12. NICUの看護の所属
A	産	小	○	11	…	× (設備中)	×	麻 (将来)	…
B	産	小	○	18	…	○	×	外・内・小	…
C	産	産	×	…	産	×	×	…	…
D	産	小	×	…	小	○	×	外科	…
E	産	小	×	…	小	○	×	麻	…
F	産	小	×	…	産	×	×	…	…
G	産	小	×	…	小	×	×	…	…
H	小	小	×	…	産	○	×	循	…
I	小	小	○	3	…	×	-	麻 (以前)	…
J									
K	産	小	×	…	産	×	×	…	…
L	産	産	○	19	…	○	○	看護部	看護部
M	小	小	×	…	母性看護 グループ	○	×	外	小
N	小	小	×	…	新	×	×	…	…

○ はい × いいえ - 回答なし … 回答不要

表9 手術関係

	13 産科手術室の有無	14 分娩室の有無	(1) 産科緊急手術室の有無	(2) 分娩室での産科性	(3) 中央手術室での産科	15 回復監視室の有無	16 分娩台数	産科手術台数	手術兼分娩台	17 産科手術の看護婦	18 週平均手術数	(1) うち産科手術数	(2) うち小児外科手術数	19 週平均全身麻酔数	20 週平均緊急手術数	21 手術室当直看護婦数	(1) 何人か	22 オンコール看護婦制度の有無	
A	×	○	×	×	○	○	2	0	0	中	120	7	5	23	5	○	2	×	
B	○	○	○	○	○	○	2	1	-	産	61	0.2 開腹	0.5	37	3	-	-	×	
C	×	○	×	○	×	×	2	0	2	中・産	-	2	-	6	1	×	…	○	
D	○	○	○	○	○	○	2	2	2	中	105	2	1	8	1	○	2	○	
E	○	○	○	○	○	○	2	-	1	産	4069 (50.1~12)(50年度)	478 17 3198 (50.1~12)(50年度)	535 (50.1~12)	535	○	2	×		
F	×	○	×	×	×	×	2	-	-	産	1825	289	100	2.0	5	○	1	×	
G	×	○	×	×	○	-	-	-	3	中	2696	529	-	13.2	1.8	×	…	○	
H	○	○	○	×	○	×	2	1	-	中	6	0~1	0	6	0~1	○	3	○	
I	×	○	×	×	○	○	2	不定	-	中	2040	50 希切関係	40	10~12	4	○	-	○	
J																			
K	×	○	×	×	○	×	2	0	0	中	1547	57	175	405	277	○	1	×	
L	○	○	○	○	○	○	4	1	1	看 中	86.7	4.2	-	67	3	○	2	×	
M	○	○	○	○	○	○	3	1	-	分娩室 は産 中	35	1	1~2	35	1~2	○	2	×	
N	×	○	×	×	○	×	2	0	0		195 数例/年	-	-	-	-	○	2	×	

表 10 その他の緊急医療関係

	23 常勤麻酔医の有無	(1) 何人か	(2) いない場合の術者	24 緊急外来体制の有無	25 夜間X線検査の可能性	26 夜間臨床検査の可能性	27 緊急患者の他へ転送	産科(例)	小児科(例)	28 緊急患者の他からの紹介	産科(例)	小児科(例)
A	○	5	…	○	○	○	×	…	…	○	200	5,000
B	○	12	…	○	○	○	×	…	…	○	5	6
C	×	…	外産	○	×	×	○	1	-	○	20	-
D	×	…	産	○	○	×	×	…	…	○	36	24
E	○	11	…	○	○	○	×	…	…	○	-	-
F	○	3	…	○	×	×	×	…	…	○	若干	9
G	○	2	…	○	○	○	○	0	3	○	15	40
H	○	1	…	○	○	○	×	…	…	○	7~8	40
I	○	1	…	○	○	×	×	…	…	○	20	23 (7月分)
J												
K	×	…	産	×	○	×	×	…	…	○	10	50
L	○	12	…	○	○	○	×	…	…	○	30~40	-
M	○	4	…	○	○	×	×	…	…	○	3	5
N	×	…	産	×	○	○	×	…	…	○	30~40	未30 小25

表11 産科救急器具

25 産科救急器具	A	B	C	D	E	F	G	H	I	J	K	L	M	N
気管内挿管セット	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
人工呼吸器	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
吸引セット	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
酸素供給セット	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
気管切開セット	○	○	○	○	○	-	-	○	○	○	○	○	○	○
輸血輸液セット	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
静脈切開セット	○	○	○	○	○	○	-	○	○	○	○	○	○	○
心電計	○	○	○	○	○	-	-	○	○	○	○	○	○	-
除細動装置	○	○	○	○	-	-	-	○	○	○	○	○	○	-
小切開縫合セット	○	○	○	○	○	-	-	○	○	○	○	○	○	○
開胸セット	○	○	○	○	-	-	-	○	-	○	○	○	○	-
血液ガス測定器	○	○	○	○	-	-	-	○	○	○	○	○	○	-
電解質測定器	○	○	○	○	-	-	-	○	-	○	○	-	-	-
中心静脈圧測定セット	○	○	○	○	-	-	-	○	-	○	○	○	○	○
大動脈圧迫器	○	○	○	○	-	-	-	○	-	-	○	-	-	-
フィブリノーゲン	○	○	○	○	○	-	-	○	○	○	○	○	-	○

表 12 母子救急センター病院（仮定）

ブロック	調査対象施設	非調査対象施設
川崎	A 市立川崎病院 B 聖マリアンナ大総合病院	a 健保川崎中央病院 b 聖マリアンナ大東横病院 c 国立共稲田登戸病院
横浜	C 横浜赤十字病院 D 警友総合病院 E 横浜市大病院 F 市立市民病院	d 済生会神奈川県病院 e 社会保険横浜中央病院 f 市立港湾病院 g 国公共横浜南共済病院 h 国立横浜病院 i 国公共大船共済病院
横三	G 国立共横須賀共済病院	j 国立横須賀病院
湘南	H 藤沢市民病院 I 平塚市民病院	k 茅ヶ崎市立病院 l 国公共平塚共済病院
県央	J 国立相模原病院 K 県立厚木病院 L 北里大学病院 M 東海大学病院	
西湘	N 小田原市立病院	m 県立足柄上病院

↓ 検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用 ↓
論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります

1 調査の主旨

神奈川県下の母子緊急医療体制における二次緊急医療の現在の能力を知り、
将来のシステム設計の資料とする。